

職員欠勤で病棟閉鎖、超過入院も コロナ第8波で医療逼迫

12/30 毎日新聞



新型コロナウイルスの流行「第8波」で医療現場が逼迫（ひっばく）している。入院患者数が確保病床を上回る「超過入院」の病院も出始め、救急や一般医療に影響。インフルエンザの流行も追い打ちをかける。年末年始は休診する医療機関が多く、前線の医師からは感染対策の徹底を求める声上がる。

「感染者数まだまだ上り坂」

「今夏の第7波ピークと同じくらいの感染者で、昼休み返上で対応しないと回らない」。東京都杉並区の「たむら医院」の田村剛院長は窮状を訴える。発熱外来の検査では1日に30～40人のコロナ陽性が確認され、陽性率は約7割。「まだまだ上り坂。インフルの患者も増えてきている」と語る。

全国のコロナ感染者は12月21日に1日当たり20万人を超え、第7波で記録した過去最多水準に迫る。さらに厚生労働省は28日、インフルが全国で流行入りしたと発表した。コロナ禍前の2019年以来、3年ぶりだ。

厚労省は12月上旬、インフルとの同時流行に備え、発熱外来やオンラインなどで1日当たり最大90万人の診療体制を確保したと説明。しかし年末年始は休診する医療機関が多く、対応力は格段に落ちる。

政府は、若者など重症化リスクの低い人の場合①喉の痛みや発熱などの症状があれば、抗原検査キットで自己検査を行う②軽症であれば医療機関を受診せず、自宅で療養③迷ったら自治体などの電話相談窓口を活用——などを呼びかけている。

救急搬送困難、過去最多に

医療体制への負荷も増している。内閣官房によると、コロナ患者用の病床使用率は34都府県で50%を超え（28日時点）、神奈川、滋賀、鹿児島は80%超。冬場はもともと心疾患や脳梗塞（こうそく）などの患者が多く、一般のベッドも空きが少ない。救急患者の受け入れ先が見つからない「救急搬送困難事案」は、19～25日の1週間に全国で過去最多の6800件に達した。

コロナの重症者を受け入れる近畿大病院（大阪狭山市）では確保した10床が埋まった状態が続いている。院内で感染した患者もあり、東田有智病院長は「一般病床も活用し、確保している病床以上のコロナ患者を診ている」と話す。

特に頭を悩ませるのが医療従事者の欠勤だ。感染や濃厚接触で働けない医師や看護師は40人前後。そのため、一部の病棟を閉鎖して、患者の入院や手術の延期を余儀なくされている。近畿大病院は地域で高度な医療を担う特定機能病院のため「なるべく患者を受け入れたいが、感染がさらに増えればもたない」と危機感をあらわにする。

年末年始は帰省などで人々の往来が活発になる一方、政府は行動制限をかけない方針だ。東田病院長は「制限はなくても、マスク着用や手洗い、手指消毒など基本の対策を徹底して感染予防に努めてほしい」と話した。（共同）